関　正夫先生－その人と学問

偉大なる軽率

立教大学教授・東京大学名誉教授
寺　崎　昌　男

「心配する連中には『5年先を見ていて下さい』と言うとるんですよ」

関さんがセンターの専任教授になられた時，当時センター主任だった横尾壮英さんが洩らされた言葉である。1973年9月のことだ。その翌10月から半年間，わたくしは日本学術振興会の流動研究員として，センターに長期滞在させてもらうことになった。

あのころ、関さんの勉強ぶりはすごかった。時には昼近くになってセンターに現れる。ひどい顔をしておられるので聞くと，昨夜は徹夜で調べ物をしていた，と言われる。それが一週間以上も続く。体に障らなければいいが，と助教授の喜多村さんや助手の渡部宗助さんたちと心配したものである。実際，ひどい風邪をひかれたこともある。

センターにあっては，懸命に科学研究費の申請の企画を立てておられた。

テーマが大学教育における自然科学教育のカリキュラムに関するものだったため，わたくしもたびたび相談をかけられた。

そもそも「カリキュラム」というものについて，教育学の世界では基本的にどういう考え方をしているか。それを研究していく上で基本になる概念はどういうものか――。

「教育内容やカリキュラムに盛られる文化の広がり・範囲を示すものとしてscopeという言葉が使われ，教授・学習の体系・順次性を表すのにsequenceということを言います」

などと答えると，実に正確に理解され，質問を重ねられる。熱心で優秀な学習者を前に，わたくしも張り切って楽しいチューター役をつとめた。関さんの先行文献の探索は徹底していた。

こちらはこちらで，関さんから例えば「概念図」といったタームを教わった。西條キャンパスの設計を考えることが当時のセンターの一つの仕事となっており，その会合での雑談の席であった。そういうことを語る時，関さんは楽しそうだった。「ああ，この人は教育者としても熱心な先生なんだな」と気づかされたものである。

「広島大学の工学部の研究設備は，例えば岡山大学などに比べると，大いに遅れています。なまじ工専としての設立が岡山より早かったものだから，かえって古い設備が残って，なかなか変えることができなかったからだそうですよ。岡山や和歌山のような大正末期から昭和初期に作られた工学部の方がずっと設備がいい。理工系では『歴史が長い』ということは，いいことばかりではないんです」。

「専門家に言わせると，瀬戸内海は，例えて言えば大きな鍋に水を張ってゆさゆさ揺らしているようなものだそうです。海流の具合からそうなるんですな。だから汚染物質が入ってきてもなかなか外洋に流れ出ない。環境汚染がなかなか防げないのはそのためだそうです」。

こういう話をおもしろく聞いた。瀬戸内海汚染公害が最もひどくなっていたころで，広大に環境問題に取り組む研究者が少ないことを，関さんはいつも嘆いておられた。それまで，科学史の論客

たちからはいろいろな話を聞く機会に恵まれていた。しかし関さんから聞く話は一味違っていた。具体性があり，実践的だった。第一線の科学研究現場にいた人の話はこういうものかと，長く印象に残った。

関さんに初めてお会いしたのは，確かその二年前のことである。横尾さんや科学史の中山茂さん，ラテン・アメリカ教育史の皆川卓三さんたちと，科研費を使って，発足直前のセンター（大学問題調査室）を訪問させてもらった時だ。

図書館の上で小さな研究会が開かれ，責任者だった前川力教授，医学部の杉原芳夫教授などが出席されていた。そこで「工学部の助教授」として紹介されたのが関さんだった。

温顔ながら真摯な学究肌の先生で，科学技術問題について理論的な勉強をされている方だということは，話してすぐに分かった。たしか広重徹氏のことなどを話し合った記憶がある。

「応用物理学でいい仕事をされている少壮研究者ですが，紛争以来，大学問題についてわたしたちが大いに頼りにしている先生です」と横尾さんが紹介されたのも耳に残っている。

同じ昭和７年生まれで，出身が郷里・福岡県久留米市からすぐの浮羽市であること，県立浮羽高校の出身で，わたくしの出身校の明善高等学校から級友も何人か入った九大理学部で学ばれたことなども，その後親交を深めるきっかけになった。

センター教授としての関さんの業績と進歩は，ここに述べるまでもない。転進の成功が証明されるまでには「５年」などという時間はかからなかった。

工学部から新設のセンターの，初の専任教授になられたストレスは少なくないものだったに違いない。

エスタブリッシュされた研究者が人生の半ばで専攻と学部を変える。そのことだけでも大異変だと思う。しかも移る先が他学部というならまだいい。海のものとも山のものともつかぬ大学教育研究の開拓場である。そこで実践的問題関心を持続させつつ，新しい分野の知識を吸収し理論構築を図らねばならない。人生をかけた賭けだったことだろう。

著書『日本の大学教育改革』のあとがきで，関さんは，広大紛争→「大学を考える工学部の会」への参画→大学改革委員会への選出→大学問題調査室研究員→大学教育研究センターへの転出，という一連の人生の激動について「学問研究の方向を転換することを決意した私は，軽卒の誹りは免れないところである」と記しておられる。

だが，傍で見ているかぎり，また結果から見ればなおさら，関さんの「軽率」は，決して不徳ではなかった。センターにとっても，日本の大学教育研究にとっても，貴重だった。一年に一度はお目にかかる一般教育学会での活躍，年々高まっていく周囲の研究者からの信望などは，横尾さんの予言と人物眼を見事に実証している。

また関さんに転進を促した1970年代初めの広島大学，そこにおける関さん周辺の良質強力な知の磁場にも，あらためて敬意を表せずにいられない。

「わたしがセンターの話をどうしようかとためらって，まわりの連中に相談すると，止める奴は一人もいなかったんですよ。私が信頼している連中ほど，それはおもしろい，やれ，やれという。全くどうしようもない」。

よくそう言ってぼやいておられたが，そうした励ましから，大学が分かり，科学技術が分かり，教育が分かる研究者が送り出されたのだ。

まだまだ引退されては困る。「そんな歳（とし）ではないでしょう」とは，他を顧みて自らをいう類で気が引けるが，やはりそう思う。

わたくしも立教で大学改革に最後の参加をしているところである。まだしばらくはお互いに軽卒を重ね，ご一緒にお仕事をしていきたい。